

第29号神奈川支部情報

発行日 2014年1月31日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

神奈川支部 HP <http://kanagawa.uketugu.org/>

神奈川新聞
2013年(平成25年)11月10日 日曜日
地域 22



稲葉さんは1943年に学徒動員で陸軍に入隊。中国戦線に送られ山西省で終戦を迎えた。

残留命令を受け中国山西省にとどまった当時の様子証言する稲葉さん＝川崎市幸区

終戦後の戦争語る

川崎で
集 会 山西省残留の元日本兵

終戦後も約4年にわたり中国での戦闘を強いられ、た山西省残留日本兵・稲葉さん(89)に聞いた。川崎市幸区で開かれた。残留命令を受けて山西省にとどまり、八路军(共産党軍)との激戦で多くの日本兵が「戦後」とされる時期に戦死した事実を詳細に語った。(富田 俊喜)

「中国山西省日本軍残留問題」として一般的に知られる。終戦後も2600人が現地にこもり、国民党軍とともに共産党軍と戦った。3分の1の兵力を残さなかったといけ、おまえは一番若い将校だから残れと言われた」と振り返った。4年間の共産党軍との戦い、戦後は太原戦犯管理所などに収容された。56年によく帰国を果たしたが、「上官たちは『残留命令を出していない』と国会でうその証言をした。残留兵は逃亡兵扱いされ、軍人恩給も受けられず、中国から来た赤の使者」とまで言われた」と当時の様子を説明した。残留兵らは裁判などでも国と争ったが敗訴。集会で稲葉さんは「ひとたび戦争になると、軍隊や政府は最後には国民を使い捨てにする。皆さん、このことを忘れないでほしい。」と聴衆に呼び掛けた。

一度戦争がになると、軍隊や政府は最後は国民を使い捨てにする。皆さん、このことを忘れないでほしい。

第12回神奈川証言集会報告

昨年11月9日、川崎市幸区古市場の京浜協同劇団の稽古場＝スペース京浜を会場にして第12回神奈川証言集会を開催しました。まずは上記神奈川新聞を読んでください。年末の一連の政治の動きに対して有効、有意義なメッセージを発してくださいました。

今回は、埼玉から稲葉さ績さんをお呼びしました。45年8月15日に敗戦によって戦争は終わったはずなのに、稲葉さんは中国・山西省に残留させられてその後も4年近く、共産党軍との戦争を継続させられてきました。共産党軍との激戦で多くの日本軍が戦後にも戦死しています。その激戦のなかを命からがら生きのびて、最後は共産党軍に捕まってしまいました。そして収容された太原戦犯管理所での人道的な待遇の中で稲葉さんは「鬼から人間に」生まれ変わった、という大変な体験をされたのです。

今回は「山西残留」の真実に迫るお話を中心にお願ひしました。戦争の歴史の真実はここにあります。安倍自民党政府の歴史認識の誤りは明らかです。じっくりお読みください。なお、京浜協同劇団では、大きな評判を呼んだ「人のあかし」の再演を決定しました。台本を練り上げ、稽古にも入って準備が着々と進んでいます。どうぞ多くの方が観劇されるようにお願いします。

私は敗戦後も中国で戦争を続けた！

——山西残留経験が伝える現代日本の危機——

解説者：石田といいます。私は山西残留の問題を研究してきている関係で、今回も稲葉さんのお手伝いをさせていただき、進行役を務めさせていただきます。

稲葉さんの場合は何度も軍や政府に裏切られるということで、大変複雑な経験をされています。そのためになかなか理解しにくいところがあります。それで稲葉さんの体験をそのままベタに話してもらうよりも、ポイント、ポイントを絞ってお話していただこうと考えています。ということで、私の方からポイントごとに質問して、それに答えて稲葉さんにお話していただくという形で進めていこうと考えていますのでよろしくお願いします。

配布されている資料に「質問項目」という資料があります。ここに書かれている項目に添って質問します。質問は時系列で、稲葉さんの子どもの時からの話をさせていただきます。最後に皆さんからの質問も受けたいと考えています。



左：稲葉さん、 右：〈解説者〉石田さん

資料にもとづいて、一つ目の質問です。

質問 1：子供の頃には教育のなかで中国人や朝鮮人についても教えられたと聞きます。それはどのような内容で、稲葉さんは中国人や朝鮮人にどんなイメージを持っていましたか？

神国論

稲葉さん：皆さんこんにちわ。元中帰連

の稲葉です。現、安倍政権が戦争への道に進んでいるわけですが、なぜこのように戦争の道に進もうとしているのか。戦争というものは、地球上最大の罪悪であるということを自分自身の体験の中から一つ一つお話ししたいと思います。

質問にある子供のころのことですが、私たちは子供のころから「神国論」に徹底的に教育されているわけです。それで、日本は**万世一系の天皇を戴**（いただ）**く国**である、大和民族が東洋を制覇することは当然である、という教育を受けてきたわけです。そこで中国人に対しては「チャンコロ」と言われて教わってきたのです。なぜ「チャンコロ」かといえば、（彼らは）学校にも行けない、頭の中がパーなんだ、「だからチャンコロだ」と教わってきました。

また、朝鮮人に対しては（この人たちは）「第三国人」だと差別的に呼んでいた。要するに「第1国」は日本人で、「第三国人」は人間ではない、というような教育を受けてきたわけです。

関東大震災のとき、中国人や朝鮮人が井戸の中に毒を入れて歩いた、ということで、中国人や朝鮮人を見つけたら軍刀で殺したんだ、というようなことを聞かされたのです。朝鮮部落などもあったのですが、皆が恐怖心をもっていたのですね。（彼らには）何をされるかわからない、と。これらのことを考えると、日本が最上の国であるという神国論によってそのことが植つえつけられたのだと思います。

解説者：子供のときからそのような教育を受けて、大学まで行かれたのですね。そこで次の質問です。稲葉さんの学生時代の写真を紹介します。（と、プロジェクターで学生服姿の稲葉さんの写真を投影・次ページに写真）

質問 2：1943年10月に大学を繰りあげ卒業になり、学徒兵として召集されましたが、

一学生としてそのときはどのような心境だったのでしょうか。



稲葉さん：1943年10月に「学校は半年繰りあげ卒業とする」「ペンを銃に持ち替える」という国の方針に従って、在学中に徴兵検査を受けました。そして卒業と同時に、その間一週間もあったかな、すぐに召集されて軍隊に入ったわけです。そのときの心境ですが、そのときはすでに生きる運命が奪われてしまっていた状態だった。忠君愛国、尽忠報国、滅私奉公という言葉のなかで、とにかく**天皇のために戦地へ行って死ぬことが最大の名誉である**、と。それしかなかったのです。戦争に行くことしか自分の前途は考える余地もないわけです。

歓呼の声に送られて戦地へ行きました。戦地へ行けば、戦死することが当然であり、天皇に命をささげて靖国神社に祀られることが最高の名誉であり、親孝行でもある、という考えで出発しました。だから、戦争を怖がるとか逃げたいという気持ちはまったくなかったのです。一途に「忠君愛国」しか頭にはなかったのです。それが当時の心境です。

質問3：その後すぐに中国戦線に送られましたが、内務班や演習などで初年兵としての教育を受けたときにはどんな経験をしましたか。またその中で稲葉さんは一生忘れられないような経験をされたと聞いていますが、そのことと、一年生兵士としての訓練の内容や経験についてもお話しください。

稲葉さん：1944年の12月に中国山東省の棗（ナツメ）荘というところにあった楓（カエデ）兵団の通信隊に配属になりました。配属されたその日から、点呼が終わると「初年兵、整列！」と号令をかけられてビンタを食らうようになって、2日目になると殴る方も痛いものだから、初年兵同士を対面で整列させてお互いに殴りっこさせるようになりました（往復ビ

ンタ）。だが、初年兵同士なのでどうしても手加減するのです。するとそれを見ていた古年兵に「キサマ！ なにやってるんだ！」と怒鳴られて余計に殴られるのです。

とくに私の場合は初年兵教育中に、中隊長から「幹部候補生の試験があるので受ける」と命令されて、その試験に2次まで受かっていて、将校になるための幹部候補生になっていたのです。するといままでも以上に私に対する虐待がひどくなりました。古年兵たちが言うには、お前が将校になって帰ってきたら今度は俺たちをいじめる気だろう。だから、いまうちにたっぷりと鍛えてやる、と言って、他の初年兵以上に特別に殴られたのです。徹底的に殴られたときは、20回くらいまでは数えていたのですが、そのうちに気絶したのです。すると水をぶっかけられてまた殴られるのです。最後は相当固いもので殴られたようです。口の中がぐにやぐにやになって、あとで外の水道で口をゆすいだら、真っ赤な血と一緒に歯が2、3本ポロリと落ちたのです。このような虐待を受けました。天皇の軍隊とか皇軍とかきれい事を言っているようですが、内実は「やくざの部隊」と言っても差しつかえないと思います。やくざの部隊ですからそれに抵抗することもできないのです。

初年兵の上には一等兵や二等兵、上等兵がいますから、「怖さ」ゆえに服従するしかないのです。そのようになる教育を受けてきたということです。これが初年兵教育で私が受けた教育期間の状態でした。

刺突訓練

解説者：稲葉さんが幹部候補生の教育を受けていたときの写真をお見せします（投影）。

質問4：大学生を含めたごく普通の若者たちが手っとり早く「兵士」になるために「刺突訓練」というものがあつたと聞きますが、どのようなものでしたか。経験されたり、目撃したことがあれば具体的に教えて下さい。

稲葉さん：1945年の2月に呂号作戦がありまして、山西省の蒙疆地区に近いところをずーっと討伐作戦で回りました。そのときは何もなかったのですが、その作戦が終わって、大隊本部から中隊長の集合教育があるということで、代県というところの中隊長本部に来ました。作戦帰りの兵の慰労のために中隊長は朝昼晩酒を飲んでいたので。そしてその日、「今日、初年兵教育があるので見に来るように」と言われて行ったのです。訓練をしている代県の城外へ行ったところ、八路军の「捕虜」を上半身裸にして、後ろ手に縛って掘ったばかりの穴の前に座らせていました。

そこへ到着した初年兵に、そのなかには補充兵と同じ年配の兵隊もいましたが、この初年兵たちに中国人「捕虜」を銃剣で突き殺す訓練をさせるわけです。私が見ていても目をそらすような残酷な場面でした。結局、人を殺したことの無いような初年兵では使い物にならないので、皆にその経験をさせるということなのです。兵隊は「人間」であってはダメなのであって「鬼」にしなければ戦争には勝てないんだという考え方が、当時の日本軍の初年兵教育のやり方だったのですね。

こうして初年兵に殺害させて、さらに殺害した全員の首を押し切り（牧草を束ねて切る道具）で切り落とす、これらを全部初年兵にやらせるのです。そしてその首を城壁の上の城門の近くに並べて見せしめにしたのです。これは私も確認しています。

これが初年兵教育の実態です。「皇軍」と言われていた天皇の軍隊はこのような罪悪を行っていて、「人間」ではなく「鬼の軍隊」に仕立てあげられたということです。

解説者：お話だけでは、わかりづらいことかもしれませんが、ので「刺突訓練」の実際の写真を示します。この写真には「不許可」というスタンプが押してあるように、当然検閲されています。当時国内ではこのような事実は報道されて

いませんでしたので知られていなかったのですが、稲葉さんが事実を見ておられるのですね。

稲葉さん自身はこのような「刺突訓練」をさせられなかったのですか。

稲葉さん：私の場合は、初年兵教育からすぐに幹部候補生教育に入って、石門の通信学校に入ったものですから、そうした経験はありません。

解説者：「刺突訓練」ではなくても、人間ではなくなるようなほかの訓練はされましたか。

稲葉さん：通信学校では、「いかにして戦争に勝つか」というような教育でした。何よりも指揮官としての教育でした。それはもっと大きな問題だと思います。

解説者：稲葉さんが先ほどの「刺突訓練」を見せられたあと、どのような振る舞いしたか、印象に残っていることを話してください。

稲葉さん：私自身にとっても、殺害場面を初めて見たわけでしたし、それがあまりにも残酷であったことから、その後、城内を歩くときも中国人とすれ違うとき、みんなそのとき殺した人の顔に見えるのです。いつ自分に反撃がくるかという恐怖心から、いつも拳銃の安全装置を外して引き金に指をかけた状態でポケットの中の拳銃を握って街を歩いていました。

私自身がこんな状態でしたので、当の初年兵にとっての恐怖感は大変なものだったんだろうと思います。刺突の場面では、顔を背けたり躊躇したりした兵隊がいましたが、そうなるだろうと思います。

解説者：そのような訓練を受けた兵隊たちが、その後顔つきが変わったとか態度や行動が変わったとか、何か変わってくるのを見たり聞いたりしましたか。

稲葉さん：私はその後、初年兵と一緒に行動することはなかったので特に記憶はありません。

質問5：このように軍隊というところは人を殺すことが行われるということを見たり聞い

たりして初期の軍隊時期を過ごされたわけですが、稲葉さんの場合は通信学校での教育の時期が長かったために、それほど多くの戦闘場面は経験されていないということですが、1945年8月の敗戦までに経験した戦闘経験や討伐への参加の体験があれば教えて下さい。

「塩の山」？！

稲葉さん：先ほど刺突訓練の話をした1945年2月の呂号作戦について少し詳しく話します。大隊本部から繁寺県というところの第一線に2個中隊が配属されていたのです。私はその三中隊と作業隊の見習い士官という立場でその隊に随行していたのです。自分の部下は持っていませんでしたが、その作業隊の隊長と常に一緒に行動をしていました。

その作戦のときは、日本軍の行く先々で討伐があることがすでに相手に知られていて、どこも無人の部落ばかりでした。その無人の部落でやったことは、略奪、放火などでした。中国人は壁の中に大切なものを隠しているということを、古年兵たちはよく知っているのです。一軒一軒家に入って、それぞれの家の壁などを全部銃床で壊して、隠してあったお酒やメリケン粉などを全部かっぱらうのです。

また、寒いものですから、そのあたりにある燃えるものは全部薪にして燃やしてしまいます。燃えるものがなくなると門柱まで壊すのです。門柱の中には木の芯が入っています。それを燃やします。家の柱まで壊して燃料にするのです。同じことを各部落、各部落で全部同じようにやってきたのです。どこの部落でも弾丸を打つような戦闘はなかったのです。

ただ、八路軍が逃げるときに敷設していった地雷にやられないように警戒することが最も戦闘らしい行動だったのです。彼らの地雷は、日本軍のものと違って、爆発の威力が上には向かうが横には威力がないというものでした。ですので、直接踏まなければ大丈夫ということで、私と一緒に行動していた作業隊の先兵が先に行って調査して、見つけるとそこに大きな丸印をつけていましたから、そこを

避けることができました。こうして実際には呂号作戦では戦闘はなかったのです。やったことは略奪と放火でした。

そのあと、1945年3月から4月にかけて大隊に通信隊が新しくできて、私とその初代通信隊長として任命を受け、新しく通信隊を編成しました。その編成が終わったときに**第2次河南作戦**があって、私は笹沼集成大隊の通信隊として派遣され、河南作戦に参加しました。黄河をわたった岔道口(ワドウカウ)というところまで行ったのです。その途中は何もないところだったのですが、部落のあった所々に「塩の山」があったのです。点々としているのです。なぜこんなところに塩があるのか、近くの山から出るのかなあ、と思って歩いていたのです。たまたまその「塩」の近くを通ったので見たところ、それは塩ではなかったのです。白骨だったのです。「**白骨の山**」だったのです。

つまり、当時の日本軍による三光政策（殺し尽くし、焼き尽くし、奪い尽くす、と言われている）によ犠牲者の白骨だったのです。だからどこの部落も人も居なければ、何もないのです。

こんなところを通して岔道口に着きました。ところが、そこではほかの大隊がみんな負けて逃げちゃっていて、私たちが包囲される羽目になってしまいました。そこで通信で状況を報告したら、大隊本部から「直ちに撤退せよ」と命令が下りました。みんな命からがら運城というところまで逃げ帰ってきました。

この戦闘も最初は笹沼小隊が敵のトーチカをめがけて攻撃していったのですが、反撃にあって行く部隊、行く部隊がみんな上からの攻撃で、どんどん谷底に落とされていったのです。戦死者でなんとか収容できた人は、山の中腹に穴を掘って、何段にも重ねてそこに入れたのです。一部の人は小指だけを切りとって持ち帰ることにし、薪などないので小枝を集めて焼いて遺骨にしました。私にとって初めての戦闘が「負け戦」となったのです。

後に、運城でこの戦闘に関する日本の

新聞を見せてもらったのですが、「大戦果、河南作戦！」の見出しで、相手の戦死者〇名、機関銃〇丁、銃〇丁奪取などといろんな「戦果」が並べられていました。全くでたらめだな、と思いました。これが私の河南作戦の経験です。

解説者：もともと、戦争に召集されたのが1943年で、戦争末期に、しかも通信隊の訓練に長い期間従事されて、実際の戦闘の経験は少なかったのですが、今お話された経験をさせていろんなことを感じてくれたと思います。次に移ります。

終戦になっても武装解除せず！

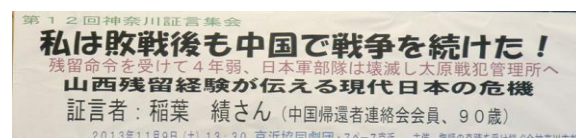
質問6：1945年8月に敗戦を知らされた時にはどんな感慨を覚えましたか？

稲葉さん：第2次河南作戦が終わって山西省の代県まで戻ってきたとき、「満洲が危ない、これから応援に行くので準備しろ」ということでした。被服や戦闘で失った兵器や装備などを補充して準備していたときに8月15日の終戦になったのです。

部隊長から、通信隊長として「無線機を操作して日本のラジオ放送をキャッチしろ」と命令を受けました。部下の兵士にやらせてはいけない、ということでした。実際に内地の放送を受信したのですが、最初は電波状況が悪くてピーピー言っってよくわからなかったものの、途中から電波状況も落ち着いてきて、これは天皇の言葉だとわかりました。だが、放送が終わってからも中隊長から「俺たちは戦争には負けていない、負けたといってもアメリカ軍に負けたのであって、こんなチャンコロに負けてられるか」「支那になんか負けてないのだ」とみんなが言っって、「みんなで山にもぐって戦闘しよう」と騒ぐ者もいました。

しばらくしてそれも落ち着いてきました。2日くらい経ったときに、山西軍が入ってきました。本来ならば相手の部隊に投降し、武装解除されるわけですよね。ところがわれわれは武装解除されないま

まに、山西軍はどんどん入ってきたのです。われわれは「この山猿め！」と悪罵を投げつけるのですが、山西軍は今までと同じ日本軍としてわれわれを見ているのです。なんの抵抗もしないのです。



敗戦後にも八路軍掃討作戦

そのような状況でしたから「負けた」という感じがなくなって今までどおりの感覚になって、なぜ武装解除されないのだろうかと考えることもしなかったのです。そのすぐあとに、大隊本部から「代県へ行って、八路軍から陣地を守れ！」という命令があっって、また代県へ戻ったのです。その時には完全武装しているのです。実際に八路軍の動向について情報があればいつでもそれに対処する、という話でした。

だから終戦になっても復員せずに、「日本軍」として戦争をしていたわけです。代県へ戻っても、部隊長の命令で現に日本軍として戦闘をしているのです。実際に私自身も「通信隊長！ お前は20名の兵を引き連れて、〇〇部落の八路軍を掃討せよ」と命令されたのです。命令を受けたときに小銃を持っている兵は10名で、あとの10名には竹やりを持たせろということでした。

出発するときは竹やりを持たせて出発したのですが、竹やりで鉄砲の弾丸に立ち向かうなんてできるわけない。そつと兵器廠に戻って竹やりを小銃に取り替えてもらって、小銃の弾丸も10発と限定されていたのですが、必要なだけの量をもらって出かけました。

払暁（フツギョウ：夜明けの意）攻撃のために夜中に出発して、払暁前に部落に着きました。夜が明けると同時に部下たちに、「攻撃開始」を命令して、ある弾丸をどんどん撃てと命令して撃たせました。撃ち終わって「集合！」と命令して、部下たちに訓示した。「敵はみんな逃げて部

落にはもういない。目的は達したので引き上げる！」と命令して引き上げたのです。このまま相手を追って行ったら部下を死なせるかもしれないと判断したからです。戦争が終わっているはずですので、部下は全員復員させるということが私の任務ですから、引き上げることにしました。

帰着してすぐ兵器廠へ行って竹やりと取り替えて、元の装備に戻して本部で部隊長に申告したのです。「〇〇部落の八路軍を撃退しました！」と。復員を待つ間でも、このようなことが実際にありました。戦争が終わっているはずなのに日本軍として戦争が継続されていたのです。負けた！という実感よりも、早く復員して帰りたいという気持ちが私を含めたみんなに強かったです。

解説者：最初に主催者から紹介があったように、敗戦後直ちにすべての戦闘が終わったわけではなく、中国の各地で日本軍が戦闘を続けて8月15日以降、5万人以上の日本軍が戦死しているという実態があります。(注)それがどうしてなのかということですが、稲葉さんも敗戦後に戦死していたかも知れないという体験されたのですが、その体験を話していただこうと思います。

そこで次の質問は少々複雑な内容が含まれていますので、少し私が解説を加えながら質問します。

質問 7：敗戦後、多くの人たちは順次帰国していましたが、稲葉さんは1956年夏に帰国するまで10年以上を要しました。敗戦後のこの**10年以上もの間何をしていたのか**、ということですが、まず最初の4年間について話していただきます。誰もが8月15日に戦争は終わったはずではないのかと疑問を持たれるでしょうが、実際は敗戦後にもかかわらず稲葉さんたちは戦争を続けたと聞きます。現地の日本軍上層部が敗戦という事実を受け入れなかったのです。日本へ帰ってもアメリカに占領されているし、資源も無いし、自分たちは山西省に残って陣地を確保し、もう一度近いうちに中国を侵略する拠点にするという考えから、中国山西省に残ることを画策したのです。

日本軍が負けたあとの中国は国民党と共産党軍の内戦が復活するだろうから、国民党の味

方をして共産党をつぶしておこうと日本軍の上層部は考えたのです。稲葉さんは「なぜ帰してもらえないのだろう、なぜ武器をとり上げられないのだろう」と考えておられたのですが、実はそのように上層部がもう一回戦争して共産党軍をつぶしておこうと考えていたからなのです。

そこで、敗戦後にもかかわらず、残留して戦闘を継続することを命じられたときの様子と、どのような思いでそれを受けとめたのか、お話し下さい。

残留命令

稲葉さん：1946年の2月ですね。旅団司令部から「中隊長集合せよ」と命令があって、ようやく復員の命令が来たと思って旅団司令部に行きました。司令部で、今村方策高級参謀から「第一軍軍司令官の作戦命令を発する」、と言われたのです。その作戦命令の内容は「現在の兵員の3分の1＝33%の兵力を残さなければ、あとの全員を含めて復員はできない」ということで、「直ちに中隊に戻って3分の1の残留者の名簿を提出せよ」ということでした。

そのとき、私は別に呼ばれて「お前は将校の中で一番若い、今日本へ帰ってもアメリカに占領されていて何もできない、それよりも中国に残っていれば2年後にはまた必ず日本軍が戻ってくる、それまで山西を確保していれば必ず復活する、俺も残るからお前も祖国復興のために残れ」と言われたのです。

そう言われたときは頭の中は真っ白だったのですが、高級参謀から「祖国復興」と言われたので「はいっ！」と敬礼したのです。上官の命令は天皇の命令ですから、その「はいっ！」と応えて敬礼したことが、私の残留の決定になったわけです。それで私は残りました。

残留という問題は、明らかに当時の国民軍第2戦区の閻錫山と日本軍第1軍の軍司令官、それと参謀長、この3人によって画策されたのです。山西省にある、資材も飛行場も全部日本軍に渡すから日本復興の足場にしろ、ということ。もう一つは日本軍戦犯20名を釈放する、と。

それらが完了したら直ちに復員を開始する、ということでした。もし残留部隊を編成しなかったら、残っている兵隊全員を殺人、略奪、放火、強姦の罪名で処刑する、ということになった。その証拠に、最初に私たちのいた独混3旅6大隊1中隊の中隊長と下士官の二名をと馬車の後ろに座らせて、日本人戦犯の看板を立てて太原城内をひきづり回して、最後は場外で銃殺にする、と言われたのです。見せしめですね。

それでわれわれは残って2600名の部隊を編成したのです。そして3年8ヶ月の戦闘で560名が戦死しました。最後に太原陥落した時に残ったものは中国共産党軍に降伏して、収容所に入ったのです。

*この間、石田さんの解説の一部を省略します。

解説者：残れ、と命令されて部下たちに伝えたとき部下たちはどんな反応でしたか。

稲葉さん：私は、自分の中隊は帰したいと考えていたので、中隊に帰ってから3分の1残すということは一切言わなかったのです。私はあくまでも全員を帰すことを考えていました。私は岩田参謀の連絡を命じられていて、中隊の曹長である古庄曹長に全員を連れて帰ってくれと、あとをたのんで自分は中隊を離れて残留問題に動いたのです。

だから、私がいたとき中隊には「残れ」とは言わなかったのですが、私が残る、ということを知った一部の兵隊が「私も残ります」と言ってきました。私は「だめだ。俺が残るからお前たちはみんなはお父さんお母さんの元へ帰れ」と言って全員帰しました。

中国兵に大和魂を！

解説者：稲葉さんは、敗戦までの戦争体験は先ほど話で聞かれた通りですが、次に残留中の4年間の戦争体験についてお聞きします。

質問8：残留中には国民党兵士の教育係を担当

当したと聞きましたが、具体的にはどんなことをしたのでしょうか？国民党と日本軍が一緒になって共産党軍と戦う、ということになっていったわけですが、稲葉さんは国民党兵士の教育係を担当されたそうですが、その具体的な内容についてお話しください。

稲葉さん：私が教育した兵隊は、第2司令官閻錫山直属の部隊で深造班と言う部隊でした。その深造班の将校の教育をさせられたのです。どのように教育すればいいのかということですが、「この者たちに大和魂を植えつけてほしい」、ということでした。

じっさいに、日本人でない者に大和魂が受け継がれるか？と腹の中で笑ったのですが、「よしわかった！徹底的に鍛えてやる」、と朝から晩まで銃剣術で血を吐くまで突きまくったのです。こんなことをずーっとやっていました。その間、閻錫山に食事に招かれて「どうだった？」と聞かれたときも、「みんな一生懸命やっています」と適当に言って、ここではうまいもの食って飲んで、帰りにはポケットには万頭をいっぱい詰めて帰ってきましたが、これが私がやっていた教育の実際です。

解説者：最初のうちはそのように教育係をやっておられたのですが、当初は国民党軍が前面で戦い、日本軍は側面的な役割を果たすということでしたが、国民党軍が稲葉さんたちの教育の成果が上がらなかったのか、大和魂が足りなかったのかなかなか強くないのです。ということから日本軍と一緒に戦うようになって経過が変わってきたのです。それで稲葉さんも通信隊長として、戦場に直接出向くようになったと聞いています。その戦場で体験したことについてお話しください。

質問9：通信隊長として、戦場で体験したことには何がありますか？

稲葉さん：通信隊長としての私の戦争体験は、先ほど話した河南作戦ですが、そのときは米軍がポツダム宣言のビラを撒いていったのです。その中には「あなたたちはもう降伏したのです。早く父母のもとに帰りなさい」ということが書いて



ありました。

部隊長は、「なんだ！こんなビラは敵の宣伝だ。こんな宣伝に乗るんじゃない！」と言って、ビラを全部燃やさせたのです。その他に戦闘を経験したのは先ほどの話通り、敗戦後に中隊長として共産党軍への部落攻撃をやったことです。

スパイ活動に従事した

質問 10：次の質問に移ります。共産党軍が強くなってきて、戦況が不利になって残留日本軍が直接共産党軍と戦闘する段階になったとき、稲葉さんは資源調査社の一員としてスパイ活動に従事して、情報収集の任務にあたったということですが、そのときの具体的な任務とその様子についてお話し下さい。

洗面器いっぱいの水で

稲葉さん：深造班の教育が終わって、命令を受けて資源調査社の работникとして情報活動に従事することになって、第2資源調査社に行きました。そこで「分水へ行って、そこでの情報を集めるように」と指示されました。そのときは、中国語が少しは分かっても情報収集するほどの言葉はわからないので、しばらく勉強しました。

まず、生活面から中国人になりすまさないといけない、日本人だということは絶対に悟らせてはいけないわけです。そこで生活面で日本人とばれてしまうことは何かと言えば、「洗面」です。日本人は両手で水をすくって顔を洗うが中国人はそんなことはしないのです。洗面器いっぱいの水で、顔を洗って、身体も全部拭いて、しかもそれを布団の上で行って一滴の水もこぼさない、これが中国風の洗面だ、と言われた。「どうすればいいんだ」と中国人から直接手ほどきを受けて、教わりました。この所作が日本人だと一番バレ易いということで、実際にその通りやってきました。どのようにするかと

いうと、手ぬぐいを洗面器の水につけて、手ぬぐいを顔に持ってくるのではなく、顔を手ぬぐいにつけて、顔の方を動かすのです。（そのような動作をしながら）そしてそれを絞って身体を拭くのです。ベッドの洗面所からいってきの水もこぼれないのです。そのやり方もマスターしたのです。

その他、中国人の老婆からいろんなことを言われても「汚い」とかは絶対に言うてはいけない、そういう態度をとってはいけないということでした。じっさいに部落へ行くと、木の葉っぱにフスマを載せて丸めて、それをつかんで木の枝を折って箸にして食べているのです。私にも「ツバ、ツバ（どうぞ、どうぞ）」と言って出されるのです。それを「シェシェ」と言って食べるのです。そういう態度をとれるようにもなりました。

最初は「汚ねー、このクソババアが」、と思うのだが、自分の仕事として行動しているうちに、自分自身も自然にそうになっていったのです。なんとも思わずに中国人と同じものを食べて、自分が頭痛のときは中国式のやり方で直しました。そのような生活をしながら仕事をしていたのです。

密偵を使って

その仕事の内容は密偵を一人付けて、密偵に情報を集めさせるのです。あるとき、阿片窟へ行けば情報がとりやすい、ということで密偵と一緒に行ったのです。そこで私自身が倒れてしまって、密偵が連れて帰ってくれたのです。あまり夢中になっているうちに阿片を吸っていたのです。そんなこともありましたが、密偵からたのまれたことですが、私がおもにやった仕事は、「拳銃を集めてくれ」「無水酢酸を集めてくれ」「ブドウ糖の粉末を集めてくれ」ということでした。日本軍にそれらが全部あったのです。それを衛生兵で知り合いがいて、その兵に集めてもらって、密偵に渡したのです。それをどうするかというと今度はそれを相手の密偵に渡すのです。交換に情報を受ける

のです。情報の交換をやっているのです。お互いに密偵を使って情報の交換をやっているのです。密偵どうしてルールが決まっているのですか。こういう道筋があって向うの情報が伝わってくるが、こちらの情報も相手に伝わっているはずなんです。仕入れた情報は隊へ送ってきました。

そんなことをやっていましたが、しかし終いにはそこも八路軍に包囲されて密偵から「山西軍はみんな逃げるよ、一緒に逃げないと命はないよ」と言われて、その密偵と別れたのはそれが最後だったんですね。そこを出たとたんに、八路軍の攻撃を受けてみんなバラバラになって、私は山の中へ逃げ込みました。そのときは4、5日置いて帰ってきました。これが分水での情報活動でした。

解説者：ありがとうございました。ここでもう一枚写真をお見せします。稲葉さんは独立混成旅団第3団におられたのですが、このような格好をしていたのですね、旗も日本軍の旗をそのまま使っています。稲葉さんのいた残留組で編成した第5団で特務団という団を編成したのですが、その中に先ほど写真にあった「今村方策」などもいましたが、この表に「通信班・稲葉績」と書いてあります。残留後もこのように通信班に所属されていたのです。この表に出ている名前の方はその多くがその後捕虜、戦犯になって長く同じような経験をされたのです。

(トーチカの写真を示して) 八路軍と戦うために造られたもので、これはコンクリートで造られたもので、この中に重機関銃など武器弾薬を配備して相手が撃ってきてもコンクリートの壁で守られるように造られています。しかしいかに激しい戦闘が行われたのかわかるように、このように頑丈なはずのトーチカがこのようにボロボロになって崩れてしまいます。そして共産党軍に敗北するわけです。残留作戦は失敗となって再び敗北をさせられたのです。

この太原城の日本軍と山西軍が陥落させられた時は稲葉さんは先ほどの話のように分水県でスパイ活動を行っていて、密偵からの情報によって山の中へ逃げていたのです。一度目は1945年8月15日に、そして1949年4月末に2度目の敗戦を経験したのです。

大変複雑で、だれも経験しない経験をされて2度目の敗戦を迎えてのですが、稲葉さんたちは、これでことが終わったわけではないんですね。帰国されたのが1956年ですから、それ

からまだ7年もあるのです。そのことについてひき続きお話をお聞きますが、長時間になりましたのでここで一旦休憩させていただきます。

<休憩>

再開します。敗戦から4年後に再び敗戦を迎えて捕虜、戦犯としてこれから7年間を過ごされます。この捕虜、戦犯の時期がその後の稲葉さんの生き方を変える、特別な時期だったので。この時期のことについてこれからお話をさせていただきます。

二度の敗戦後、永年収容所で

質問10：残留日本軍が共産党軍に敗れ、二度目の敗戦を迎えた後、捕虜・戦犯としての日々を過ごしました。捕虜として永年収容所で労働教育を経験したと思いますが、その内容と感じたことを教えてください。

稲葉さん：最初に行ったのは永年の収容所でした。ここでやっていたのは労働改造ということで私のやったことは麦刈、綿摘み、雨が降って洪水があったときは土嚢を運んで、川の土手の修復などもやりました。最後の方になったら、永年に大きな集会所を造るということで、レンガ積みをやりました。その当時の心境として仕方がない、そのうちに日本へ帰れるだろうと歌っていたのは「異国の丘」でした。

その当時は坦白などはやっていませんでした。なに言ってるんだ、「俺は1銭5厘で狩りだされてただけだ！」と開きなおっていました。当時ハガキが1枚1銭5厘だったですからね。また、私は通信隊で人は殺していない、強姦もしたことはない、皆がやってきたような罪悪に俺はやっていないのだ、という考えでいました。そこでは戦争犯罪についての反省はまったくありませんでした。ただ、労働はきついが、なんとか早く日本へ帰れないものか、とだけを考えていました。



これが永年収容所における私の心境でした。

解説者：いま、12番の質問にも応えていただきました。労働だけではなくて永年収容所は、坦白という罪の告白、すなわち自分が日本軍としてどんな戦争犯罪を行ったのかということについて、文章で書き出せということを求められていました。当時の中国共産党側としては、単に処罰し、処刑するということではなくて、日本人が戦争をしたという事実を見つめ直してほしい、ということでした。戦争に参加したことが悪いことだったということを見つめ直して日本へ帰れば、同じような戦争はくり返されないだろうという考えから、収容されているすべての日本人に、自分のやったことを書きだせ、ということを求めています。

稲葉さんはその当時、自分が犯罪を犯したとは思っていなかった。命令されただけだ、通信隊だった自分は戦闘にも参加していない。そういう認識でいたのです。永年の収容所では、山西省に残って戦争を続けていた軍人や、その家族たちも含めて1000人くらいが収容されていたのです。1950年ころの段階です。稲葉さんはその中の一人でした。中には、きちんと反省して自分の罪を認めていた人もいましたが、稲葉さんのように自分の行為を認めず、まったく反省していない人もいました。このことは軍の上層部ほど、自分の行為や罪を認識していませんでした。

先ほど軍の編成表を見ていただきましたが、その名前が出てくるような人たちは、あまり反省していないからということでその1000人のうち、100人余の人が太原戦犯管理所に移動させられます。残りの900人が西陵収容所へ移動します。永年から2か所に分かれて、稲葉さんたちの方は捕虜ではなくてここから「戦犯」扱いとなります。

一方、下級兵士や家族たちは西陵と言うところで、皇帝の別荘のような施設で比較的自由にのびやかに過ごすことになるのですが、稲葉さんたちは「重要戦犯」として太原戦犯管理所で、ひたすら「坦白」という自己の罪に向き合うことが求められました。この太原戦犯管理所ではどんなおことを考え、どんなおこととして過ごしていたのかについてお話していただきます。

太原戦犯管理所へ

質問11、12は時間の都合で割愛します。

質問13：その後、稲葉さんは重要戦犯として太原戦犯管理所に移管されました。そこでは

ひたすら自己に向き合い、戦争体験を振り返って坦白を続けることを求められたと聞きました。どんな生活をして、何を考えていたのでしょうか。

稲葉さん：太原戦犯管理所についてですが、連れて行かれた時には手錠をかけられたり、貨車に閉じ込められて、貨車の周りは全部銅線や鉄線でぐるぐる巻きにして、それを振じって、絶対に貨車から出られないようにして送られたのです。太原に着いて、どこへ連れて行くのだろうと考えていたら、かつて八路軍を閉じ込めるために日本軍がつくっておいた監獄でした。その監獄の独房に一部屋に7、8人ずつ入れられたのです。独房ですからたいへん狭いのです。入獄と同時に、会話は一切禁止を最初に申し渡されました。お互いに目と目を合わせても話ができないのです。

食事は、当時共産党軍は1日に2食しか食べていなかったが、われわれには3食出してくれました。犯罪者ですから、粟飯に上に唐辛子で煮た大豆が載せてあるだけの質素なものでした。私は分水で（情報活動のとき）もっとひどい食事をしていたので、それでもご馳走でした。だが、食べたことがない人は口に入れた途端にむせて、鼻から粟(ア)が飛び出すというようなこともありました。私のよう



に、「おいしかった」と言ってきれいさっぱりと食べた人いなかったですね。

そこで朝から晩までいつも言われていることは、〇月〇日に山海関を通過して、そのあと捕まるまでの毎日の行動を書きなさい、ということです。かつて日本軍は中国人捕虜はほとんど全部殺してきたのですね。だから、どうせ自分たちも殺されるのだろう、と思ったのです。ましてや、手錠をかけられたり、こんなとこ

ろに押しこめられたりして、粟飯を食わされて、どうしてもそう思うのです。どうせ書くだけ書かせて、絞るだけ絞っておいて最後はばっさと殺すつもりだろう、と考えていたのです。ヤケッパチの気持ちと、処刑に対するものすごい恐怖心が入り交じって、どうせ殺されるんだったら適当に書いて出せばいいや、「勝手にしろ！」という気持ちです。だから入った当時は反抗心だけの自分でした。

でたらめを書いてはいけない

しばらく経って、私の担当の政治工作員からいろいろ話をされ、書いたものを見て「でたらめを書いてはいけない、まじめに書けばあなたたちも先も開けてくるんだよ」というようなことも言われました。そんな話を聞きながら、ひょっとすればうまくいけば日本へ帰れるのかな、と思うようになってきたのです。そしてとにかく、何でもかんでもたくさん書いてやれ、とあることないこといっぱい書いて、これだけ書けば少しは分かってもらえるだろうと思って書いて出したら言われました。「あなたはこんな所へは行っていません」「でたらめなことは書かないように」と言われて、すぐに突き返されました。「こちらは全部調べてあるのですよ、こんなでたらめを書くより、自分自身がやったことを真面目に書きなさい」と言われたのです。

これほど徹底的に調べあげられておれば適当なことは書けないあ、とあらためて考えさせられました。そこから少しづつ書いていったのですが、書いているうちにやはりだんだんと自分が悪いことをしたのだということが分かってきたのです。こんなことをしてきたなあ、といういろいろ思い出すのです。しかし、そこで書いていることは「自分自身が助かりたい」「日本に帰りたい」という気持ちで書いているから伝わっていないのですね。したがって反省にはなっていないのです。また書いてもって行っても、もう少し自分で考えなさい、と言われるのです。

人間は強制では変えられない

それから自分自身も苦しみました。工作員が何を言わんとしているのだろうと考えました。その苦しみのなかで、ようやく「認罪」から「謝罪」となって自分自身の立場で書いているのだと、日本へ帰りたい一心で書いているのではなくて、自分の行動によって中国人民がどんな思いをしたか、という立場に立って書いていなかったとがわかってきたのです。そのことで書いてもって行ったらよくわかってくれた、立派です、よく反省しましたねと、はじめてほめられました。ここまで行きつくには4年くらいはかかりました。この**私の体験から言えることは、強制的に人を思想改造しようとしても何百年かかったってそれはできない、自分自身がそれを認めて、自分自身の内面からそれを改造することによってできる、**ということです。すなわち「鬼から人間へ」と言われたこのことが「人間改造」であったことが初めてわかりました。

太原戦犯管理所管理所で一番苦しんだのですが、その苦しみをのりこえて、初めてわかったことは、この「立場」の問題が理解できて初めてわかったのです。だから中国人の寛大政策ですが、ただ自分たちを殺すつもりはないんだなとわかったとき、これが寛大政策だった、と思っていたのですが、本当の寛大政策とは人間改造、自分の将来を本当に改造してくれた、これが本当の中国人民の寛大政策だったのだということがわかったのです。このことが太原戦犯管理所管理所において自分が一番鍛えられたことだと思います。

解説者：ありがとうございました。

撫順戦犯管理所のことについては、昨年ここで京浜協同劇団の人たちが「人のあかし」の公演によって、広く真実を明らかにしていただきました。また一方、稲葉さんたちが体験された太原戦犯管理所についてはあまり知られていないのですが、ほぼ同じ時期だったのです。やはり同じように、自分自身を見つめて、自分自身が変わっていく、というように自分の罪を認め、その反省が認められるようになった、それ

は人間が人間に求められたものだ、という稲葉さんのお話でした。

解説者：時間が迫ってきたので、予定した質問事項を少し飛ばして、16番の質問に入ります。その前にまた、写真を見ていただきます。(投影)

これは撫順戦犯管理所での様子ですが、このように学習の機会が与えられました。稲葉さんはそれまで皇国史観という、天皇中心の教育しか受けていなかったのですが、管理所で初めてそれ以外のものの見方や考え方、当時の中国の社会主義的な考え方にも触れる、というような経験もされました。撫順に比べれば少し少なかったようですが、議論をする場もありました。またこれも撫順と同じようにスポーツをする場もありました。これはバスケットボールをしている写真ですが、ここに稲葉さんが写っています。厳しいお話をされていたのですが、こんなこともありました。

最終的には、稲葉さんも罪を反省したことを褒められて、起訴免除となって13年ぶりに日本へ帰られました。興安丸で帰ってこられた時に、稲葉さんも写っている船上の写真もあります。(投影) 家族の方が迎えにこられた時の写真、帰宅後近所の人たちに挨拶している写真をお見せします。(投影)

それでは質問に移ります。

＊質問14、15(時間の都合で割愛しました)

「逃亡兵」扱い

質問16：13年ぶりに日本に戻ってしばらくして、敗戦後も戦闘を続けていたにもかかわらず「逃亡兵」扱いにされていたことを知ったそうですね。勝手に残って勝手に戦争をしていた、誰も命令なんかしていない、と言われたのですね。政府は敗戦後も戦争を続けた事実を認めようとしなかった。稲葉さんたちのような存在は政府にとっては困る存在なのです。それで「逃亡兵」にしたのですね。2600人残留した中でケガをした人戦死して人も大勢います。帰国して長生きした人も軍人恩給を一切受けられなかった。つまり、政府や軍に「使い捨て」にされたということですが、そんな軍そして政府にどんな思いをもっていますか？

稲葉さん：日本に帰ってきたときは、当然復員としての扱いを受けるものと思っていたのですが、逃亡兵扱いで「国賊」扱いをされました。「中共からの赤の使者」

だと言われて公安警察にまで睨まれて、ある人は会社へ戻ったら、公安警察からの情報によって会社から即刻首になってしまった、というケースもありました。このように「赤の使者」として人間扱いしてもらえなかったのです。

なぜそうなったのかというと、国会において私たちを残した張本人である澄田軍司令官と山岡参謀長が、私たちは日本へ連れて帰るために努力した、残すような命令はしていませんとウソの証言を行ったのです。私たちも国会へ何回もお願いしたし、裁判に訴えてきたのですが政府は澄田らの主張を受け入れて、私たちの主張を認めようとしませんのです。

民主党政権のとき、少しは有利になるだろうと思って参議院に書類を出してお願いしました。ですが、何回通っても「話はわかります」とは言うのですが結論は出してくれないのです。最終的に言われたのは、政治的にはこの問題は大変大きい、発表したら大変なことになるからダメなんです、とこれが国会議員が言っていることです。経済的にも出す余裕は無い、ということです。

要するに、一回決めたことは変えられないのだから、これで我慢しなさいということです。みんな年をとって、もう何人も残っていないのです。みんなが死んでしまえばこの問題は終わりだと、何もうなくなりますということです。敗戦後、軍国主義者が画策したことはすべて闇に葬ってしまう、ということです。これが国会議員さえ言っているのですから、日本の軍隊の不都合なことは最後まで切り捨てるとということです。張本人は日本の帝国主義者だ、ということが言えると思います。

戦争というものは、最後は国民が捨て去られるものだ、ということをみなさんはよく記憶しておいてほしいと思います。

解説者：国会でも裁判にかけても事実が認められなかったのはなぜか、というと戦争終結後にも戦争を続けるということはポツダム宣言の違反なわけです。したがって、日本政府も知

っていて黙認していたわけですからどうしても認めるわけにはいかなかったのです。稲葉さんたちは軍にいいように使われて、最後まで見捨てられて現在に至っているということです。軍や政府は決して国民を守るものではなく、使い捨てられるのだ、ということを稲葉さんはくり返し証言されているのです。

質問 17：最後に、直近の特定秘密保護法、集団的自衛権の拡大解釈、憲法の改正、靖国参拝、領土問題、従軍「慰安婦」の否定など、現在の日本にはかつての戦争を正当化し、戦争ができるような体制を作ろうという動きが活発になっています。戦争を体験した稲葉さんから見て、あの頃と今は似ているのかどうか、それについてどう感じているのか具体的に話して頂きたいと思います。まず、憲法改正の動きについてどう考えておられますか？

特にお話しされたいと仰っている3つの点についてお話ししていただきます。最初に憲法改正の動きについて、稲葉さんのお考えをお聞かせください。

憲法改悪は許さない

稲葉さん：これは憲法改正ではなくて「憲法改悪」であるとはっきり断言します。ポツダム宣言にもとづく終戦によって、平和、国民主権、基本的人権という3点を打ち出しています。これが現在の憲法です。しかしながら、安倍政権の改悪においては戦争放棄、国民主権の項目を消してしまうということです。そして第1条に「天皇を元首とする」という、われわれは天皇を元首とする天皇制のためにこれほどひどい目に会ってきたのです。再び天皇を元首として戦争放棄、国民主権をないがしろにして、民主主義から天皇制に戻るというわけです。「戦争放棄」を消して「国防軍」を創設する、昔のように陸海空軍をつくるということです。昔のように国民の人権もすべて奪われてしまいます。

現在、その道を歩いています。麻生副総理が何を言ったか、ワイマール憲法をいつの間にかナチス憲法に変えたあの方法をまねすればいいと、国民が反対する間もないうちにだまって変えてしまえばいい、と副総理が言っているのです。石

破自民党幹事長が「もし戦争に行きたくないという国民は処刑すればいい」と、こんなことまで言っている。まるで昔の軍隊そのままです。これがいまの政府の現実ではないですか。私はたいへん危険だと思います。

これは明らかに、平和憲法を戦争憲法に変えるということであって、一党独裁体制ですべてそのような方向に持っていこうとしていると思います。私の今までの戦争体験から見て大変危険な状態だと思っています。これが憲法に対する私の解釈です。

国民を戦争に動員するための靖国

解説者：ありがとうございます。次に、東アジアの各国から抗議が来ている閣僚による靖国参拝について話しておきたい、とおっしゃっているのでもよろしくお願いします。

稲葉さん：靖国問題ですが、安倍さんが「死んだ人をお参りするの何が悪いんだ」と言っています。今年の夏は東アジアの諸国からの批判があつて靖国参拝には行かなかったが、ほかの大臣に行かせて「私の意志は同じですよ」ということを伝えているのです。靖国神社とはなんであるか、安倍さんは知っているのですか。

「侵略」という言葉は学問的にも国際法にもそのような定義は無い、ということまで言っています。1869年に、明治維新と戊辰戦争守るため（→「明治維新と戊辰戦争の戦没者を祀るため」ではないかと思います）の東京招魂社というのを先につくったのです。しかし1879年に、陸海軍の軍事機関がこれを管理して、靖国神社という名前にしたのです。

1930年以降は、天皇陛下のために名誉の戦死した者を靖国の英霊として祀り、国民を戦争に動員している役割を果たしてあるわけです。そればかりではなく、1978年にはA級戦犯を合祀して、戦争の犠牲者として祀ったのです。これで日本には戦争犯罪は無い、戦争犯罪に

されたのは連合国による濡れ衣だと言って戦争犯罪を否定しています。

「侵略の定義に関する条約」

侵略の定義についても1974年12月14日の国際連合総会決議3314（→「侵略の定義に関する条約」）が発効しています。国際連盟でも侵略の定義ということが決められて、a. 一国の軍隊による他国領域への侵入または攻撃、若しくは一時的なものであってもかかる侵入または攻撃の結果として生じる軍事占領、または武力の行使による他国領域の全部若しくは一部の併合、以下b.からg.まで細部にわたって明確に定義されているのです。それなのに「そんな定義は無い」と安倍さんは平気で言っています。

まして、侵略戦争の首謀者である東条英機などが戦争の犠牲者だなんて、これが国を守る英雄だと言えるんですか。あの侵略戦争を「正義の戦争」だと、どこからそんなことが言えるのですか。あまりにも歴史認識が足りない、間違っているということを、あえて今の安倍首相に言ってやりたいと思います。あなたはタカ派では無い。そんなもんじゃない。ハゲタカよりもっと醜い貴方だ、だと私は言ってやりたい。（この証言集会の1ヶ月後の12月26日、安部総理は靖国参拝を強行した）

慰安婦は人権蹂躪だ

解説者：最後に従軍慰安婦という存在を曖昧にする人たちが問題になっていますが、中国でも慰安婦が存在し、さらには強姦という形でそのような行為が行われていたわけですが、稲葉さんも見聞きしたこともあると思いますので、そのことを踏まえて、お考えをお聞かせください。

稲葉さん：慰安婦問題について、つい最近ある政治家が戦争にあってはそういうことはやむを得ないんじゃないかということ発言している政治家もいるわけですが、この問題は女性に対する最も人権を蹂躪した問題であります。従

軍慰安婦の人たちはみんなダマされて前線に連れて行かれているわけです。

私は独立混成第3旅団というところにいたのですが、そこにも慰安所がありました。旅団司令部には、将校用として日本人の慰安婦が居て、大隊本部とか第1戦の中隊には、兵隊用として韓国人の女性を慰安婦として配置されていました。そして明らかに軍がこれを管理していました。なぜそう言えるかというと、衣食住は全部軍が管理していて、兵隊に対する割りふりを中隊がやっているのです。そして1ヶ月に1回は、検梅（梅毒検査のこと）と言って軍医が2名でその女性たちを検査するのです。

私の中隊が所属している旅団でのやり方を見てもそれはわかります。当時、韓国人慰安婦に対しては「朝鮮ピー」と言って、第三人以下のことを兵隊たちはみんな言っていたのです。「日本の大和民族の優位性」という教育、政策の結果がこのような問題をおこしたのだと思います。私は、大きな犯罪であると結論づけます。

解説者：ご自身の経験に基づいて今のように発言をしていただきました。最初に準備してきた質問については、時間の都合で一部割愛しましたがこれで一通りはこれで終わります。

写真をもう少し見てください。これは稲葉さんたちが置かれた現状を回復してください、と国会へ陳情に行かれた時の写真です。（投影）小泉純一郎が厚生大臣だったときに陳情を受けてくれた時の記念写真で皆さんの真ん中に写っています。小泉も何とかしなければなあというようなことは言っていたようですが、何らの進展も無いままに今日に至っているのが現状です。

<質疑>

解説者：残りの時間は質問の時間とします。できるだけ稲葉さんのご経験に基づく内容での質問をお願いします。

質問：昭和天皇は自分の言葉で生前、国民に謝罪的な言葉（戦争中の日本国民の被害）を話さず、全く不誠実な人間だと私は思いますが、昭和天皇のあり方、及び天皇制への思いはどう

でしょうか。

天皇制は戦争の産物だ

稲葉さん：天皇制は昔からあったということで私たちが教えられてきた制度です。この国は天皇制の国である。この国の軍隊は天皇の軍隊である。皇軍である、ということでした。天皇が中心であって、天皇は神様である。今の天皇は現人神だ、と信じこまされてきました。いわゆる神国論に基づいた天皇制は、我々にとっては戦争そのものの産物であると思います。

現在の自民党憲法改正案では「天皇を元首とする」、と書いてありますが、すなわち、今の新憲法の前の、昔の天皇制に戻るとのことだと思います。天皇制とは、我々国民にとっては必要がないものであって、われわれ自身が自らの権利によってみんなで祖国を守っていく、ということが一番大切なことだと思います。そういうことで私としては最後にお話したいことは、現在の戦争政策をいかにして食い止めるかというのは皆さんがやっている平和運動を強化し広げていくということが一つだと思います。

安倍政権は、憲法改悪や、集団的自衛権などいろんなことをやろうとしているのですがうまくいかないために、いま秘密保護法を通そうとしています。これは

昔の軍機保護法と同じで、国民の口も目も閉じてしまうということです。麻生さんが言っていたように国民がしら来うちに憲法改悪をやっしまおうということです。

私自身が皆さんにお誓いしたいことは、この問題に対して平和のための私たちの力をもっともっと固めていきたいと思います。これを誓って今日の話を終わりたいと思います。

このあとも、会場からの発言があつて稲葉さんのお話も続きましたが、長文となりましたので報告はここまでとします。以降の話は、別途報告します。

<市民活動フェア 2014 参加企画>

神奈川証言集会

日時 3月9日(日) 13:00 より

場所 神奈川県民センター305 (3階)

第1部 13:00 より

講演：撫順戦犯管理所で何があったのか
再び「人のあかし」の脚本を書いて考えたこと

講演者：脚本家 和田庸子さん

第2部 14:10 より

証言：侵略戦争に参加した体験から、現代政治を憂う

証言者：山西省での戦争体験者 松本栄好さん
(91才)

「人のあかし」再演

一昨年暮れの公演で大きな評判を呼んだ「人のあかし～ある憲兵の記録～」の再演が決定しました。日程は以下のとおりです。

集会の最後に劇団代表で、演出を担当されている藤井康雄さんが呼びかけを行いました。



	川崎(スペース京浜)			横浜(神奈川芸術劇場)		
2014年4月	11日(金)	12日(土)	13日(日)	25日(金)	26日(土)	27日(日)
昼の部 2:00	○	○	○		○	○
夜の部 7:00	○			○	○	

* チケット販売などについては劇団に問い合わせてください。(TEL044-511-4951 FAX044-533-6694)